

国語科における書く力を身につける授業づくり

ー 協同的な学びを通して ー

学籍番号 199360

氏名 和田 耀史

主指導教員 池嶋 伸晃

1. 研究の目的

1.1 背景

2018年(平成30年)12月の中央教育審議会(答申)では、子供たちの現状について、判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べることなどについて課題があると指摘されている。また、学ぶことの楽しさや意義が実感できているかどうか、自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識を持っているかどうかという点で肯定的な回答が国際的に見て相対的に低いことなども指摘されている。さらには、学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを生活や社会の中の課題解決に生かしていくという点に課題がある。生徒自身が何を学ぶことができた、何ができるようになったのかを明確に示すことが重要である。

1.2 研究の目的

高等学校新学習指導要領では、対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えると共に他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働することができる力が必要とされている。以上のように学習指導要領においては「主体的で対話的な深い学び」の実現が目指されていると言える。本実習では協同的な学習を通し、国語科学習指導要領における論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりする事ができる力を育成できる授業を構想する。

2. 研究計画

2.1 実習の進め方

実習計画として基本学校実習Ⅰ・Ⅱでは主に国語科教諭の授業の見学を行う。まずは実習校の現状を把握するということが重要であり、実習校の授業の傾向や生徒の課題を研究授業に活かすことが必要である。その為にまず国語科の授業見学を通して、実習校における生徒の課題や国語科教諭の実践例などを把握する。発展課題研究Ⅰ・Ⅱでは国語科だけでなく他教科の授業見学も行い、実習校全体での授業の傾向を把握する。また他教科での生徒の様子などから、更なる生徒の現状の把握に繋げる。

2.2 実習校生徒の現状

授業見学を通して気づいた点として、実習校では全体的に生徒同士で話し合うなどの協同的な活動を積極的に行っている点がある。その為生徒は全体的に協同的な学びに対して抵抗がなく、積極的に行う生徒が多かった。また、生徒は自分の意見を他者に向けて発信することを活発に行っており、自分の考えを相手に認めてもらいたいと考えている生徒が多い様子であった。生徒の課題としては実習校国語科では生徒の読解力の育成が目指されていた。生徒が考えや意見などを表現する為には読解力が足りておらず、読解力の向上に時間を使ってしまい表現する時間を作ることができていない状況であった。

以上を踏まえ研究授業を行う際には「協同的な学習」「国語科学習指導要領における論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力の育成」「他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりする事ができる力の育成」をポイントとして研究授業を行った。

2.3 研究授業の実践

基本学校実習Ⅱでは第二学年の生徒を対象に読解力の育成を目指し、協同的な活動を取り入れて研究授業を行った。教材として2015年のセンター試験を用いて大学受験を意識させる授業を実践した。授業の結果としては問題を難しいと感じる生徒が多く、話し合いの活動に繋げることができなかった。しかし生徒の振り返りからは話し合いなどの活動があつてよかったという意見が見受けられた。

この反省を活かし発展課題研究Ⅱでは教科書の和歌を題材にし、和歌創作を通し生徒同士の考えや表現などを共有・評価する活動を取り入れて研究授業を実践した。最初は生徒自身に和歌の修辞法を自由に選ばせて創作をさせていたが、自由度が高すぎる為混乱する生徒が多く創作を十分に行うことができなかった。それを踏まえ使用する修辞法を指定したことにより和歌の創作がしやすくなり、その後の全体共有や評価の活動に繋がった。生徒の振り返りからも、自分にない表現の仕方などを見つけることができたと感じる生徒が多く、和歌についての興味関心を高めることができる授業になったと言える。

3. 研究の成果と展望

本実践研究においては、和歌の創作という活動を通して実習校の生徒の自分の意見や考えなどを積極的に発信できる点を活かし、更に生徒同士で共有・評価する活動を通して生徒自身に何を学ぶことができたのかを明確に示すことができた。また授業の難易度や教師側の指示の仕方など自分自身に足らなかった点も見つけることができた。今回は和歌の創作という活動を行ったが、先行研究などを見ると同じ和歌の創作でも全く違った角度からの創作や、和歌の創作以外で協同的な活動を取り入れた実践などがあつた。

今後の展望としては和歌を扱う授業においての方法を更に探るだけでなく、現代文や文学など古典とは違った題材の場合も想定する必要がある。国語科全体を通した生徒の協同的な学びに実現に向けてより一層取り組みを進めることが必要である。